

## 趣旨説明 (2010年度 公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て)

著者	高石 恭子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	12
ページ	10-12
発行年	2011-02-28
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002706">http://doi.org/10.14990/00002706</a>

## 趣旨説明

高石 恭子

皆さん、こんにちは。企画者ということで、最初にこのシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。甲南大学は臨床心理学の教員を中心としまして、子育て支援、親子への支援の長い歴史を持っております。私も数えてみれば、この大学で仕事を始めて二〇年以上たってしまったんですけれども、その間いろいろな形で子育てをめぐる研究活動、実践活動に携わってまいりました。

文科省の助成を受けた共同研究のプロジェクトとしては、二〇〇一年に一度目のシンポジウムを開きまして、タイトルが「現代人と母性」というものでした。当時はちょうど子育て支援の領域で、新生児というのはこんなにすばらしい能力を持っている、母親がそれを早くにしっかりと受け止めて母子の愛着関係を早期に築くことがその後の子育てにとって何よりも重要なのだ、自然分娩で完全に母乳育児をするのが非常に大事なんだということが、ムーブメントとして最高潮に語られていたと

きであります。そのシンポジウムでも、そういった内容の議論が熱く戦わされたことを記憶しております。

一方、私はこの大学の学生相談の専任カウンセラーをしておりまして、日々学生さんとその保護者の方の相談を受けている立場です。ちょうど二〇〇〇年前後ぐらいから学生相談の領域でも、大学生の不登校とか、ひきこもりとか、なかなか社会にうまく巣立っていけない学生さんたちが増えてきました。子どもが——と言っても学生なんですけれども、熱が出て授業を休むとなると、保護者の方が欠席の連絡をしてこられる。思うような成績がとれないと、教員に理由を尋ねに來られる。それから、就職先も保護者の方が熱心に探される。保護者懇談会をすれば、両親揃っておみえになって、子どもの学修簿を見ながら、「どうしたらこの成績がもう少し上がるか」を熱心に考えておられる。そういうことがどんどん顕著になってきた時代でもあったんです。

どうして今の若い方たちはなかなか親と離れられないのか、うまく社会に巣立っていけないのか。二、三年前には「内定うつ」なんていう言葉が学生の間で流行りました。卒業単位もほぼ揃って、学業は優秀で、希望の会社の内定も取れた途端にうつ状態になる。社会が怖くて足がすくんでしまつて、夜も眠れなくなつて、そのまま卒業も危うくなつてしまうという学生さんも出てくるようになりました。こういった現状を考えていく

うちに、若者と親の問題というよりは、生まれてからの長い間の子育ての問題、親子のそれまでの関係性の結果として今があるのではないかと考えるようになったんですね。

二度目は二〇〇六年で、「育てることの困難」というタイトルでシンポジウムを行いました。現代の日本で、どうしてこのように育てることが難しい、大変だ、と感ぜられるようになってしまったのか。それはなぜだろうということを学際的に幅広く検討してみようという機会を持ちました。当時、父親の子育て参加は進んできてはいたんですが、それでもやはりまだまだ一部の動きであって、多くの母親は子どもと非常に閉塞的な状況の中で子育てのストレスを高めているという実態が浮かび上がってまいりました。

今回は三度目のシンポジウムで、検討したいこととしては二つのポイントを考えております。

一つは、これまで甲南大学は地域の方々にも意識調査やインタビューという形で研究にご協力いただいて、子育てというものを考えてきました。今日もこのフロアに来てくださっている方もありません。私どもの研究に協力してくださるお母様方、お父様方は基本的に非常に熱心で、一生懸命子育てをされている方なんです。決して育児放棄をされているわけではない。そういう方であっても、やはり子育てのストレスは非常に高い。そして、子どもを預けられる公的な支援が広がっていく中

で、自分の都合で子どもを預けることに対して、特に母親は罪悪感を抱いていて、わが子と離れることに強い不安を感じておられるんです。そのような意識の有りようが、結局は自分を追い込んでいってしまうのではないかと。そういう側面があることが見えてきました。

これをどう考えていったらいいかということを研究会のメンバーで模索しておりましたときに、心理学や医学は「愛着」ということに非常に注目して、ここ二、三〇年の間子育て支援をやってきたけれども、親子がどうやって「分離」していったらいいのか、どうやってそれぞれに自立していったらいいのかということをしつかりと提起していくことはしてこなかったんじゃないかと気づきました。親は、その方法を教えられる機会が与えられてこなかったんじゃないか。ここはやはり一度視点を変えて、愛着はもちろん大事なんですけれども、分離という視点から子育てを見たときに、何か見えてくるものがあるのではないかと。一つ、そのことを考えてみようと思います。

それからもう一つは、母親と子どもがどうしても閉塞的な状況に陥ってしまっている今の状況を打開していくために、お父さんという存在は非常にキーになるということです。ここ二、三年、ますます父親の子育てがブームになってきました、まさか学長先生から「イクメン」という言葉が聞かれるとは想像外だったんですけれども、それぐらい父親も子育てするんだとい

うことが流行にはなってきた。

それ自体は悪いことではないんだけど、果たしてマクラレンの格好いいベビーカーに乗せて子どもを連れ歩くのが父親の子育てなんだらうか。あるいは子どもを抱っこして、一生懸命ベビーマッサージに通うのが父親の子育てなんだらうか。もっと男性が子育てを通して成長していけると、それから今の子育て状況を変えていけると、いろいろな可能性を持っているはずだと思っているんですね。そういうことも含めて、父親の子育てを母親の子育てと対に置きながら、父親のほうに少し焦点を当てて、いろいろ考えたいと思っている次第です。

本日は、その方面のご専門の先生方にご講演をお願いしております。長時間になりますけれども、ぜひフロアの皆さんとも一緒にこの問題について考えを深める機会を持たらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。